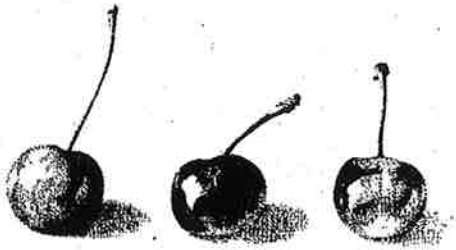
明治の佐伯三青年（九）

――龍溪・鳴鶴・鶴谷――

御手洗　一　而
（会員・埼玉県川越市）



三田演説館

藤田は始めて栗本鋤雲に会ったとき、この人かと思った。その経歴を聞かされていたからである。かつて会ったことのないタイプの人で、明治の武士という感銘を受けた。幕府の軍艦奉行や外国奉行を勤め、パリー大博覧会に派遣された徳川昭武一行に随って渡仏し、一行が帰朝後も幕府の駐仏使節として当地にとどまっていた。ナポレオン三世から徳川幕府へ武器の援助の申入れがあったとき、国内の内争のため外国の援助を断乎拒否したこと、かといって兵庫開港の勅許をパリーで知ったときは一人で祝杯を挙げ、又ちょうど上野戦争中に帰朝した彼は、幕臣の重臣として榎本の函館五稜廓の抗戦に誘われながら自ら引退した話など、藤田や箕浦はよく知っていた。

いかつい顔と偉丈夫に似合わず、温厚で物静かな話し方と高邁な人格は、彼の子供のような藤田の心まで包んでしまった。たゞ出社するだけで安心感のある存在であった。

そんな栗本は若者が好きであった。

さきに論説を任せた古沢や藤田のような、どこまで突っ走るか分らないような鋭角的な若者が好きであった。常に中庸不遍の栗本は、自分にない何かをこれらの若者に求めたのかもしれない。

藤田が、福沢や栗本の後楯をもって仕事のできるのは幸運であった。しかし入社以来は毎日苦痛の連続であった。藤田の文才をもってしても眠られぬ夜が続いた。後年藤田は当時の模様を次のように矢野に述懐している。

「初めて新聞社に入って日々論説を草することとなった時、一カ月間ばかりの苦しさはとてもお話にならなかった。もう職業替えをしようと思うたことも度々であったが、そのうちこれに馴れるに従うてやや楽になり、もうしまいには、やっと筆も意のままに動くようになった」と。

無理もない。まわりの有力紙を見廻しても藤田のような年少者はいなかった。

「東京日日」には、二人の智将がいた。

福地が主筆兼社長、岸田が編集長として入社し紙面を一新している。福地源一郎（桜痴）は、訪欧の岩倉大使に随行し、再度の洋行を果たしたが、一行から離れてエルサレム経由で先に帰国する。たまたま起った征韓論に憤慨して外務省をやめている。のち「江湖新聞」時代の彼のスタッフだった條野・西田等に迎えられて「東京日日」に入社、七年十二月のことである。福地は「太政官記事御用」の看板をかかげ、政府支持を公然と表明している。他の有力紙が政敵として批判したのはいうまでもないが、公報に関する限り信頼されるという一番の強味があった。

もう一つの有力紙に「朝野新聞」がある。

「柳橋新誌」で著名な成島柳北が、七年九月社長に迎えられて、「公文通誌」を改題した「朝野新聞」で筆をとっている。

「東京日日」が政府筋に近く、「郵便報知」は駅逓頭の後楯があったが、「朝野」は後に末広鉄腸が応援するものの、当初は成島の筆一本で却って声価を高めていた。

福地は「聡明で才子肌」、栗本は「重厚で学者肌」、成島は「軽妙酒脱」で文人肌であった。いずれも旧幕臣でありながら福地は明治政府に親近し、栗本と成島は新

政府の禄を食むを快しとせず野にあり、栗本が中庸を守り、成島が成上り官僚を揶揄するところは、よく夫々の性格を表わしている。

その他に通俗新聞として「読売新聞」や、政論の「あけぼの新聞」（曙）、「評論新聞」が創刊されている。

藤田がこれらの一流記者に伍して、一人前の歩調を合わせるには並大抵の苦労ではなかった。まして御大栗本は、例の調子で余り口も出さず好きなようにさせていた。藤田や箕浦はその翼の中で助け合いながら一日一日と成長していった。読者の反応を考えるよりも次の日の草稿を考える方が先であった。

四苦八苦に明けくれる二人がにっこりしたのは初めて給料を貰った時であった。諸本によれば七・八十円とも百円とも書かれている。塾生時代に十円の生活費に苦労した藤田にとっては、夢のような金であった。二人は退社後京橋に出た。京橋新橋間は馬車が走っていた。

「乗るか」

藤田が声をかけたが、箕浦は首を横にふって歩き出した。

銀座通りは、煉瓦路が整い七年の秋には西洋建築が完成している。歩道と車道が区分され、松梅桜桃楓の並木が植えられ、石室は英京ロンドンを模し街道は仏京パリーを真似て作られ、一定の間隔をおいてガス燈も配置されている。

「明治も変ったなあ」

「俺達のようにか」

今や二人は新進の花形記者になろうとしている。藤田は銀座二丁目に来て、ゆっくり歩き出した。三台の車、黒ぬりの人力車が止っている。

「箕浦見ろよ。太政官記事御用だって」

藤田ははき捨てるように言った。

東京日々新聞の社屋である。一枚の看板が二人の競走相手であることを知らせてくれる。自信家の藤田は改めて闘志を燃やしながら通り過ぎた。二人の行きつく先は決まっていた。

次の休日の朝早くひょっこり豊吉が藤田の下宿を訪ねて来た。

「何事か豊吉」

藤田はまだ床の中で横になっていた。

「何事かはないでしょう。はいこれを」
と言いながら持って来た包を開けた。風呂敷の中には新調された衣類の一式が入っていた。
「いつまでも貧乏書生でもないでしょう。人は身なりからと言いますからね。それに開館式のこともあるし、酒ばっかり飲んでもおれませんよ」
「それからこれは宝物」
と、続けて小さな紙包を開けた。中には、矢野に貰った黒木綿の羽織がきちんと繕ろわれていた。
藤田はフトンから身を乗り出して聞いていたが、豊吉の話が終るのももどかしく豊吉の手をとってフトンの中に引っぱりこんだ。
豊吉は、されるがまゝに身をゆだねた。

豊吉が身なりを心配した開館式とは、三田演説館の開館式のことである。藤田は諸先輩に交って祝詞を述べることになっていた。豊吉は、箕浦との会話からそのことを知り、聴衆を前に先輩に交わる藤田の晴姿を想像していた。
五月一日夜の開館式は、塾内外の差別なく聴衆を入れた。
藤田は、小幡・朝次・坪井・四屋等先輩塾友に交って演壇に立った。卒業生として又塾から初めての新聞記者として「開筵の祝詞」を述べた。
「吾人の固有せる権利を干(たて)にし、吾人の守るべき義務を戈(ほこ)にし、吾人の保つべき自由を原野とし、各其胸臆を吐露して弁論駁議の戦場を開き、内は以て吾人に利し、外は以て世を益するの方便となさんとす」から始まり、今日の論議を後日の実用とするために、この館とこの会が必要であり、「実用を問はずして論ぜば事悉く空に帰すべし」、「実用はいかなる妙議高論も、現在の有様とそごせば空論であり、万巻の書を読むよりも、世の変遷を知ることが第一であり、そのためには交際を広くして、「博く衆人と交り己を利し人を益するの疆界を大にし、以て世の公論を動かし聊か影響を生ずることあらば亦一大快事ならずや」と、自説を陳述している。
いかにも理路整然として簡明に大衆に訴えている。しかも藤田の主眼は、自分個人よりも公の立場をとり、あくまでも公論を動かし、少しでも影響を生ぜさせることである。民権論啓発の野望が鎧の下からちらりと覗かれ

ている。すでに記者の眼である。

もともと明治新政府は、文明開化推進のために幾多の新聞を奨励した。西洋文化の紹介や布告の伝達には、これほど便利の良いものはなかった。政府が一定の部数を買い上げて閲覧させたり、郵便制度を利用して発送を無料にする特権なども与えられていた。しかし、政府にとって知られたくないことを暴露される弱味もあった。そのために、政府は明治六年十月に「新聞紙印行条例」を改正し、

第十条　国体ヲ誹シ国律ヲ議シ及ビ外法ヲ主張宣説シテ国法ノ妨害ヲ生ゼシムルヲ禁ズ

第十一条　政事法律ヲ記載スルコトニ付妄ニ批評ヲ加フル事ヲ禁ズ

という言論取締規則に付随する全十八か条からなる「新聞紙発行条目」を制定した。政府はこの条例によって一応の歯止めをかけたつもりでいたが、時勢は、もっと逼迫していた。

前に書いた「民選議院設立ノ建言」が世に出て以来、尚早論に設立論、それに反駁するものと、言論界は明治七年を期して活発化し、天下を二分する政論は、言論戦国時代の様相を呈していた。

藤田や箕浦は、その一年間塾の最終学年として傍観拝聴する立場にあった。

しかし、今や少壮記者として、その論争のまっただ中に追いやられている。主役のピンチヒッターが、予告なしに舞台におし出されたようなものである。

現に藤田は、「大臣ヲ斬罪ニ処セヨ」という過激な論評を読んでいる。小論は、「評論新聞」の第二号に掲載されていた。この新聞は、三月に西郷の幕下だった海老原穆の主宰する集思社から創刊されている。政府の言論封鎖とはうらはらに、過激論の台頭もそこまで押し寄せていた。

（つづく）